1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0290100635		
法人名	医療法人蛭慈会		
事業所名	グループホームポータウン		
所在地	青森県青森市港町2丁目15-9		
自己評価作成日	令和4年10月5日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 青森県社会福祉協議会		
所在地	青森県青森市中央3丁目20番30号		
訪問調査日	令和4年11月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

青森市中心部に近い立地条件にあり、入居者のニーズを満たすための社会資源が多様にある環境です。現在は新型コロナウイルス感染予防のため、地域活動に制限がありますが、可能な限り参加し、地域の一員として活動しています。コロナ禍であっても、施設行事や日々のレクリエーションの充実を図り、笑顔で過ごせるよう工夫をしています。食事には特に力を入れており、青森の台所・問屋町から購入の新鮮な生魚からの調理や、週末は生本マグロ等のお刺身を提供しています。母体が医療機関であるため、身体状態の変化に24時間の連絡体制を確保しています。また、看護師による健康相談が週1回あり、いつもと違う気づきを気軽に相談できます。医療充実の特性を活かして看取り介護を行っており、福祉と医療が連携してケアすることで、最期まで安心して暮らせる体制を整えています。「地域の中で自分らしく生き生きと」を理念に掲げ、全職員が同じ目的に向かって日々介護をしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

医療法人が経営しているため、医療との連携が強く、日常的に医療面でのケアが充実し、利用者、家族とも安心して生活することができる環境である。
避難訓練や日常において、地域とのつながりを深めるための取り組みを積極的に行っている。
また、代表者から定期的に市場からの海産物の提供があり、食事においても楽しみながら生活できるよう支援している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「地域の中で自分らしく生き生きと」を理念に掲げ、全職員で毎朝黙読して業務に就いている。理念を共有することで、同じ目的に向かって入居者へ接することができるように取り組んでいる。	地域密着型サービスの役割を反映させた理念を掲げ、近隣住民とのコミュニケーションも積極的に行っており、管理者をはじめ職員全員が利用者への支援に反映できるように心がけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍ではあるが、朝夕の挨拶を心がけ、見える化に努めている。町内ねぶた祭りへの参加を実現し、入居者と一緒に山車を見ることができた。避難訓練が行われる際はサイレンの音に驚かないよう、ご近所一軒一軒へ説明のため訪問している。	町内ねぶた祭を利用者と一緒に見たり、地域住民の認知症の相談に応じる等、適宜、地域との交流を図るための働きかけを行っている。また、避難訓練前には近隣の世帯を訪問して説明し、顔馴染みの関係を構築している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍で見学はできないが、認知症の相談を直接電話で受けたり、ケアマネジャーを通して相談を受けている。実習生を受け入れ、地域貢献へ繋げている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議のお知らせに会議の意義や役割を示し、積極的に意見や助言をいただいている。いただいた意見や助言は課題とし、改善へ向けて全職員で話し合い、サービスの向上へ繋げるようにしている。	運営推進会議の通知に会議の意義や役割を示し、積極的に意見や助言をもらえるよう働きかけている。また、系列施設と合同で運営推進会議を行ったこともあり、地域の気づき等、意見を聞く良い機会となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の参加メンバーは地域包括支援センターの職員に協力を得ている。2ヶ月に1回新聞を作成し、市役所や地域包括支援センターへ配布し、日頃の取り組みを伝えている。提供しているサービスを明らかにし、サービスの質の向上に努めている。	運営推進会議のメンバーとして、地域包括支援センターの職員に協力を得ており、会議の議題を伺ったり、適宜連携を図っている。行政とは、困難事例の際に助言をいただく等、協力関係を構築している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアについて外部・内部研修で繰り返し学習し、身体拘束を行わないという姿勢で取り組んでいる。居室や玄関には施錠をせず、入居者の外出傾向を観察し、一緒に外気浴を楽しむ等の取り組みをしている。	身体拘束についてマニュアルを整備すると共に、研修等で、管理者及び全職員が身体拘束の内容やその弊害について理解するよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部・内部研修で定期的に学ぶ機会を作り、理解を深められるようにしている。日々のケアで不適切な言動や対応があった時はその場で注意をし、虐待へ繋がらないように適切な対応方法を指導している。また、虐待防止適正化の指針を整備している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部・内部研修で定期的に学ぶ機会を作り、理解を深められるようにしている。入居者や家族から利用について情報を求められた時に、全職員が説明できることを目標に取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は重要事項説明書を基に十分な説明を行い、同意を得ている。ご本人やご家族が契約に向けて疑問や意見を話しやすい環境を整え、受けた内容は納得が得られるまで十分に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日頃より苦情等が話しやすい環境や関わりを意識し、受けた苦情等は真摯に受け止め、速やかに対応できるような体制を整備している。運営推進会議では意見を話す機会を作り、率直な意見をいただいている。また、重要事項説明書に苦情窓口を明示している。	日頃より、意見や要望等が話しやすいように働きかけている。また、玄関に意見箱を設置したり、家族に手紙等を郵送しており、返信をいただいた場合には、その意見の内容を全職員に周知する取り組みを行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月行われる職員の全体ミーティングで、法人全体の運営について情報を共有している。職員から出された意見や要望は、毎月行われる理事長参加の管理者会議で相談をしている。勤務体制は職員の意見を十分に聞きながら行っている。	新施設でもあり、運営方法等について積極的に職員の意見を聞くよう心がけている。また、職員からの意見への対応が難しい場合は、職員が納得できるまで丁寧に話し合いの場を持ち、納得してもらった上で業務に当たれるよう対応している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の日々の努力や勤務状況については、定期的に代表者へ報告をしている。保有資格を活かした職員配置や賞与に評価制度を取り入れ、職員のやりがいへ繋げている。健康診断は年2回を基本に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	力量や経験に応じた年間研修計画を作成し、取り組んでいる。外部研修受講後は研修復命書を作成し、内部研修の講師となり、全職員へ周知する仕組みを取り入れている。受講時は日々のケアに支障がないよう、勤務体制を整えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で顔の見える交流は困難な状況が続いているが、電話での情報交換や連携は活発に行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご家族より相談を受付けた後、電話で十分に話を聞いた上で自宅へ訪問している。自宅訪問ではご本人が話しやすい環境作りを心がけ、会話しつつ、身体状態の確認や生活に対する意向、不安な事等を引き出せるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご本人へ会う前に、ご家族より現在の困り事や不安な事を聞き、問題解決に向けて取り組むようにしている。入居までの時間はご家族と連絡を密に取り、お互いに不安感のない穏やかな入居に向けて対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談を受けた段階で、当施設入所以外の多様な介護保険サービスを紹介し、ご本人やご家族の意向に合ったサービスの選択をしていただいている。その際は事業者と連携して対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活歴から趣味や特技等の情報を把握し、日常生活に活かすようにしている。日常生活の中では入居者と共同し、助けたり助けられたりの関係性を築きながら生活をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で直接会うことができない中、月1回、担当者よりご家族宛てに手紙と暮らしがわかる写真、2ヶ月に1回、施設での取り組みがわかるホーム便りを送付している。お手紙のお返事をいただくことで、ご本人を共に支える関係作りに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で外出が規制され、馴染みの人と会うことができない中、馴染みの場所へドライブして、思い出を忘れない取り組みをしている。電話で話す機会も積極的に行っている。また、ご家族からの手紙は取り次ぎを行い、交流を継続できるように支援している。	利用者との会話から馴染みの人や場所を把握しており、必要に応じて手紙のやりとり等をお手伝いし、関係継続の支援を行う体制である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	できる事・できない事、得手不得手を理解し、日常生活の中で入居者同士が共に助け合える場面を作り出せるように取り組んでいる。苦手な人や合わない人との交流は、トラブルに発展しないように見守り、座席の工夫等も行っている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去の実績はないが、入居時に重要事項説明書で、退去後においても自宅や地域で生活を継続できるように相談援助を行う旨、説明をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時の情報を基に、日々の暮らしから思いや希望等を把握するように努めている。意思の表出が困難になった時でも、今までの関わりからご本人の気持ちを汲み取れるように努めている。	入居前・入居後に話を聞き、利用者の意向を把握するように努めており、それぞれの担当職員が会議の場で報告し、職員間で共有を図る体制となっている。また、その報告に対して職員全員が意見を述べ、職員全員で意向の把握に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居後においても可能な限り馴染みの暮らしを継続できるように、ご本人の話をよく聞き、ご家族やケアマネジャーと連携を密にとり、情報収集に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日のバイタル測定や食事摂取量の記録、排泄時間の記録や日中の活動内容や身体状態等の様子、夜間帯の睡眠状況等の把握に努め、生活リズムを把握している。日中の活動内容から、できる事・できない事の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成時にご本人やご家族より意見や暮らし方の意向等を伺い、担当職員によるモニタリングやアセスメントの情報から、課題を上げている。また、身体状況の変化やご家族の希望に変化はないか等、常に情報の把握に努めている。	利用者がその人らしく暮らし続けることができるよう、日常のコミュニケーションから思いや意見等を聞いている。また、担当職員によるモニタリングやアセスメントの情報から課題を抽出する等、介護計画は、利用者本位の個別具体的なものとなっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	暮らしぶりは個人のケースへ日々記録し、全職員で共有できるようになっている。身体状況の変化や発した言葉、思い、計画に沿って、実践した結果等を詳細に記録している。記録の内容は介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	当施設は地域のニーズに応じて令和4年3月に開設したばかりの施設である。ご本人が住み慣れた地域で暮らしの継続ができるよう、医療連携体制の充実や外出支援等、今後も地域と共に多機能化に取り組んでいければと考えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍により地域資源の活用が不十分な中、運営推進会議で地域包括支援センターや町会長から地域活動の情報を得たり、施設内での暮らしぶりを報告する等、コロナ禍であっても豊かな暮らしを楽しむ方法を模索する機会を得ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人やご家族の意向により、月2回の訪問診療を利用している。既往歴や服薬状況を把握し、日々の心身状態の観察と記録により、主治医と連携を密にしている。緊急時の通院援助も行っており、その際は必ずご家族への説明と同意を得ている。	入居時のアセスメントで利用者のこれまでの受療状況を把握し、利用者や家族が希望する医療機関を受診できるように支援している。また、月2回の訪問診療等、母体病院の協力を得る体制を整えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の看護師の訪問により、いつもと異なる身体状態の不安や気づきを相談をしている。必要に応じて主治医へ繋いでもらい、迅速な対応を行うことができている。小さな気づきが大きな病気の早期発見に繋がるケースが多いと感じている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院の実績はないが、万が一入院した場合は、医療機関との情報交換やご家族も含めた話し合いを行い、できるだけ早期に退院できるように努める。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取り介護の実績はないが、重度化した場合における対応指針と看取りに関する指針を整備し、方針を明確にしている。	「看取りに関する指針」及び「重度化した場合における対応に関する指針」を作成し、ホームとしての方針を明確にしている。現在まで看取りの実績はないが、利用者や家族の意向を踏まえ、母体病院と連携して24時間の連絡体制を確保し、緊急時は駆けつける等、医療機関や家族と共に連携を図りながら支援していく体制を整備している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	日中、夜間の緊急時対応マニュアルを整備し、事務所へ掲示している。救急救命研修は一部の職員は受講しているが、全職員には至っていない。今後、定期的に全職員が訓練できるようにしていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害対策計画を策定し、安全な避難行動を確実に行うことができるよう、全職員で防災教育や訓練を行っている。夜間想定避難訓練は入居者と職員で年2回行っている。今後は災害に備えて、備蓄品の充実を図っていきたい。	非常災害対策計画を策定し、年2回、訓練を行っている他、内部研修においても災害対策等を学習している。また、避難訓練時には近隣世帯を訪問しており、緊急時に協力を得られるよう、関係作りを行っている。災害備蓄品については、食料品等を主に備蓄しているが、今後は暖房用具等の充実を図る計画がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシー保護マニュアルを整備し、羞恥心への配慮や入浴・排泄介助におけるプライバシー保護に努めている。介助時の言葉かけには特に注意を払い、尊厳を重視した対応を心がけている。守秘義務の誓約書を全職員が提出することを必須としている。	プライバシー保護マニュアルを作成している他、介助時の声がけに注意を払い、尊厳を重視した対応を心がけている。また、全職員が守秘義務の誓約書を提出しており、ホームとして尊厳を保持し、個人情報保護の徹底を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者個々の思いや希望に応じて、個別ケアに取り組んでいる。意思表示のできない入居者は表情や反応、生活歴等から読み取り、自己決定する場面を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎日のスケジュールに決まりはなく、その日その日で好きなように、自分のペースに合わせて生活をしている。絵を書く人が居れば、読書をしている人、テレビを見ている人、ご飯作りの手伝いや洗濯物干し等、ご本人のやりたい事で過ごしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時、その日の天候や気分によって衣服を一緒に選び、髭剃りや整髪は起床時に必ず行っている。着る物にこだわりが強い方は、その人らしさを尊重して対応している。散髪はコロナ禍のため施設内で対応し、好みの髪型を希望することができている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は入居者の希望を聞きながら、自宅でいつも食べていたような家庭的な料理にこだわり、職員が作成している。嗜好調査も行い、希望を叶えられるように工夫している。毎週金曜日はお刺身の日として設定している。また、盛付けや片付け等も一緒に行っている。	献立は利用者の嗜好に配慮した家庭的な料理を意識して、職員が作成している。また、毎週金曜日はお刺身の日と設定しており、利用者が食事を楽しめるように取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量の記録により摂取量の把握ができ、異常時は看護師に相談・指導を受けている。嚥下や咀嚼状態により食事の形態を変え、対応している。また、盛付けの工夫により、見た目でも食事を楽しめるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に歯磨きを行い、入居者の力量に応じて介助方法を変えている。必要に応じて歯科衛生士へ相談し、口腔内の健康に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄記録により個々のパターンを把握し、トイレ誘導やオムツ交換を行っている。脱紙オムツを目標に、日々職員間で情報を共有して取り組んでいる。トイレ誘導時や排泄中は羞恥心に十分に配慮した対応を心がけている。	利用者一人ひとりの排泄記録を作成し、トイレ誘導やオムツ交換を行っている。また、「脱紙オムツ」を目標に掲げ、カンファレンスで報告して、具体的な解決策を検討する等、日々、職員間で意見を交わして支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便は健康のバロメーターと捉え、特に注意を払っている。朝礼で排便の無い期間を全職員で共有し、その日の活動や水分量、トイレ誘導時間等を考えている。異常時は主治医へ報告し、指導を受けて対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた支援をしている	入浴は毎日行っている。入浴する人はその日の体調や気分により決め、概ね週2回程度入浴できるように配慮している。入浴剤を使用し、入浴を楽しめる工夫をしている。なるべく羞恥心への配慮も行い、同性介助を心がけている。	週2回程度は入浴できるように支援しており、入浴剤を使用して入浴を楽しめるように工夫している。入浴したくない時は無理に勧めず、声がけを工夫する等、自主的に入浴するよう根気強く支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	毎日、睡眠状況の観察を行っている。人それぞれに睡眠パターンが違うことを理解し、不眠傾向が続く時は日中の過ごし方を工夫したり、改善が見られない時は主治医へ相談している。体調に合わせて昼寝の援助も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局から届いた薬は職員が朝昼夕のセットを行い、薬の内容等への意識を高めている。服薬チェック表により飲み忘れの防止を行い、二重三重のチェック体制により、事故防止に努めている。薬変更時はご家族へ説明し、全職員へ周知している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や日々の暮らしぶりから趣味や特技、得手不得手を把握している。畑仕事や生け花、絵を描く、毛糸を編む、俳句を作る、習字を書く、家事をする、何もしない等、その人らしい役割や楽しみ方ができるように援助している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出規制があるものの、天気の良い日はコロナ感染対策を行い、施設の周りを散策したり、バルコニーで日光浴を楽しんでいる。ドライブ行事を企画し、車窓を楽しむ機会を作り、人がいない場所では車から降りて景色を楽しむこともある。	天気の良い日は散歩をしたり、バルコニーで日光浴を楽しんでいる。また、コロナ禍でも季節が感じられるよう、感染対策を講じながら花見や紅葉狩り等のドライブに出かけ、外出行事を企画し、利用者の気分転換を図っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設でも自宅での生活が継続できるように、希望の入居者はお金を持っている。コロナ禍で使用する機会はないが、持っていることで心が豊であると感じる。コロナウイルスが終息したら、外出や買い物の機会をたくさん企画したいと考えている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍のため、ご家族との絆は電話や手紙で繋がっていると感じる。ご家族からはいつでも電話がかけやすいような環境を作り、こちらからも定期的に、ご本人と一緒にご家族へ電話をしている。手紙の代弁や代筆等も行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木目調の造りで施設感を感じさせない建物になっている。飾り付けは入居者と一緒に行い、季節を感じられるような工夫をしている。室温や湿度、空気の入替え等、空調は小まめに調整している。職員がたてる物音や会話には十分に気をつけて対応するよう、日々努めている。	調度品等は過剰に派手なものではなく、一般的なものを使用し、家庭的な雰囲気を保つ一助となるよう、配慮している。また、利用者と一緒に季節を感じられる物を作成し、掲示している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	4畳半の小上がりがあり、昼寝をしたり、洗濯物を置んだり、自由に使うことができる。テレビの前にはソファを設置し、寛ぎながらテレビを鑑賞できる。テーブル席では本を読んだり、絵を書いたり、会話を楽しむ等、思い思いに過ごせる空間となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	部屋には馴染みの置き物や家族写真、自宅で使っていた物等が置かれ、心地良く過ごせるような工夫がされている。職員と一緒に作った物や絵を飾ったり、誕生日のプレゼントの品を飾っている他、施設での生活用品も馴染みの一点になっている。	居室には馴染みの物等を持ち込み、落ち着いて過ごせるように配慮し、位牌等の持ち込みもある。また、行事の写真を掲示する等、質素になり過ぎないように支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内はバリアフリーとなっており、共用スペースには全面的に手すりが設置され、安全に移動ができ、自由に行き来ができるように工夫している。自室を迷う方には目印を付けて、場所の間違いを防いでいる。		